

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

第7章「無碍の一道」

第七章は「念仏者は無碍の一道なり」という力強い言葉から始まります。人間の煩惱や善し悪しの分別が一向に障りとならずに、私たちに往生浄土の道を開いてくれる教法がある、それが念仏の法であることを教えているのが第七章です。

それを証明するべく、往生の障りと思われている事柄がいくつか挙げられています。注目すべきは、「天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし」という言葉です。仏教においては、存在を因縁生（縁起）と見て、固定的実体は認めません。ですから、「天神地祇、魔界外道は実体的に存在するものではなく、どこまでも人間の妄情により創り出されたものである」と言ってしまうばよさそうなものですが、それらが実在していることを認めるかのような表現となっています。

これは縁起の理法を理知で把握したぐらいでは、それらから解放されることがない人間の深い闇と現実を見すえての言葉なのでしょう。特に当時は、鬼神信仰が深く人心に刻まれ、人々を縛っていたことでしょうし、さらにそれは個人の信仰に止まらず、強い共同体意識に支えられて地域全体に行き渡り、絶対的公共性を持った自明の理として受け入れられていたのだと考えられます。

その現実にあって、それらが往生の障りにならず、むしろ往生浄土の道を歩むことによって、鬼神の繫縛から解放されることこそが救いであることを知ら

せんとして、「天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし」という表現になったのだと思われます。実際、深遠な教理を一方で掲げながら、「仏教の威儀をもととして、天地の鬼神を尊敬す」という顛倒に陥っていた聖道の諸教の実態がありました。そこに他力念仏の法でなければ明らかにならない人間の課題があるのです。

文中、「天神地祇、魔界外道」と列挙されてはいますが、これらは並列的にあるのではなく、内にある外道性が外に形をとったものが「天神・地祇・魔界」であると言えます。外道なるものが単純に外にあるのならば問題は簡単なのですが、内なる外道性によるがゆえにその根は深いのです。たとえ念仏申す人であっても「外道は本日かぎりで止めました」ということにはなりません。

ですから、一方的に「天神・地祇・魔界」を否定するのではなく、それらに迷うあり方を通して、その根は実は自分にあるのだという自身の外道性を内に見開いていき、さらに「外道にすぎる限り、自らが救われることはない」ということに目覚めていく以外に鬼神からの解放の糸口はないのです。

その目覚めを人間にもたらすものこそ本願の名号です。衆生救済の相がすでに本願に言い当てられ、その本願が念仏として私たちに届けられている。それを他力信心として頂くとき、「天神・地祇・魔界」に迷う衆生の歩みを単なる徒労に終わらせずに、浄土を願う歩みに転じさせるというのが「念仏者は無碍の一道なり」ということの内実でしょう。

その念仏救済の道理に無自覚であるがゆえに、私たちは「諸善」を積むことに救いを求め続けるのです。しかし、そのことは限りなく自己に背き続けることであり、それが「罪悪」そのものなのです。

だが、自らの罪を思い知らされるそのときこそが、外道の歩みを超えていくときでもあるのです。自分を生き生きさせないものを私自身の中に抱えていた、よく私の罪業の深さを知らせて頂いたと仏智を仰ぐ私が誕生する、そのことが喜びであり、その領きを賜ったことが往生の一道に立つということなのです。